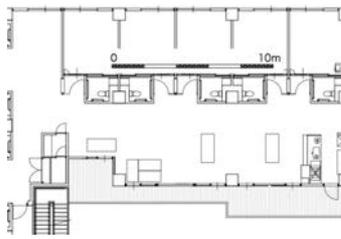


実践女子大学空間デザイン研究室 2015 年度卒業論文

■高齢者施設における居場所の可能性

2012 年開設のユニット型の M 特養は、リビングが殺風景で生活感がなく、入居者の生活も単調で画一的になりがちである。施設側とワークショップおよび入居者へのヒアリングを重ねた上で、殺風景だったリビング空間に手を加えて、入居者の居場所とディスプレイスペースをつくった。事前調査・事後調査を行い、効果を検証した。

全体に大きな変化をもたらしたわけではないが、自らコタツに行って座ったり、展示を見て回るなど、主体的な行為の場面が観察されるようになった。また、実施前は環境の改修に懐疑的だったスタッフの意識に変化が見られるようになり、自ら環境に手を加えようとする意識も現れてきた。スタッフにとって施設環境が、介護のための空間から生活空間へと変化してきた可能性がある。



リビング平面



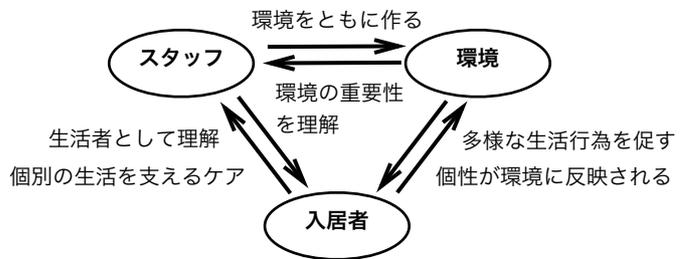
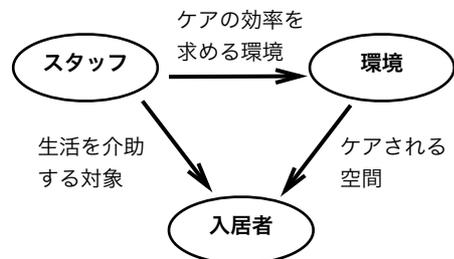
実施前リビング



コタツコーナー



ディスプレイコーナー

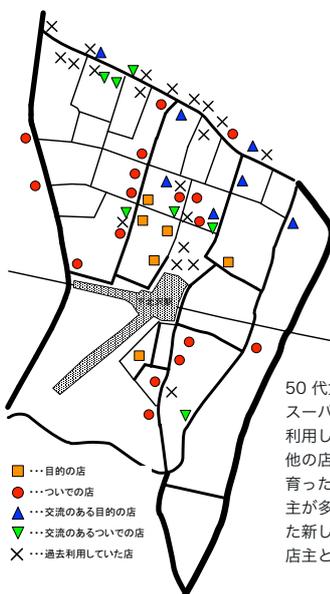


■店との関わりが広げる下北沢の生活

下北沢の魅力は主に外部の視点から語られたものが多く、実際に生活している住人の視点からのものは少ない。下北沢住人 20 人 (20~60 代) にヒアリングを行い、店の利用を中心とした地域での生活の様子を分析した。

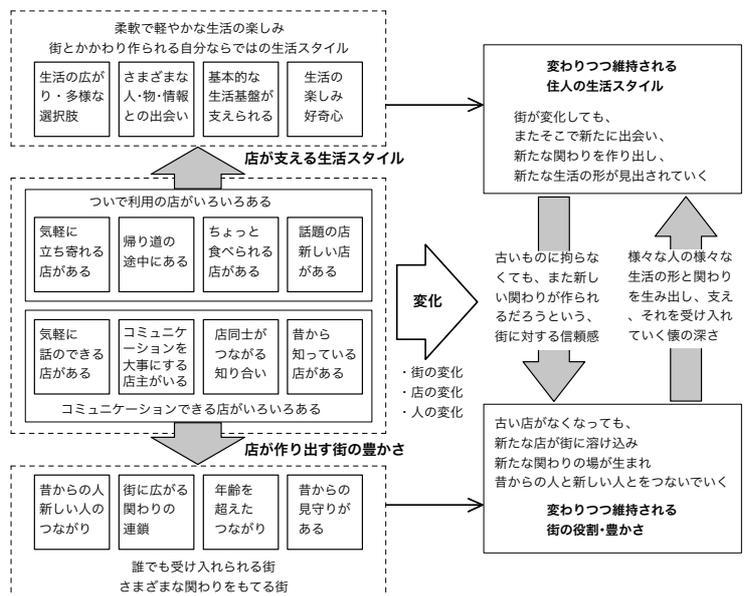
下北沢にはついでに寄る店や関わりが持てる店があり、そんな店が誰でも受け入れられ、様々な関わりをもてる街を作っている。また、そういった店との関わりが柔軟で軽やかな生活の楽しさや、街と関わりつつ

作られる自分ならではの生活の形を支えている。下北沢の再開発による変化に対しては、その変化をも自然に受け入れ、新しい関係を築くことに対する街への信頼感をもっているようである。店によって作られ支えられる住人の生活スタイルと街の役割・豊かさは互いに支え合うことで、変化によって崩壊することなく、変わりつつも維持される柔軟なものになっている。



50 代女性 / 専業主婦 / 4 人家族
スーパーやドラッグストアをよく利用し、その行き帰りについでに他の店に寄っていく。下北沢で育ったため昔からの知り合いの店主が多く、たまに会いに行く。また新しくできたカフェやパン屋の店主とも店内で交流がある。

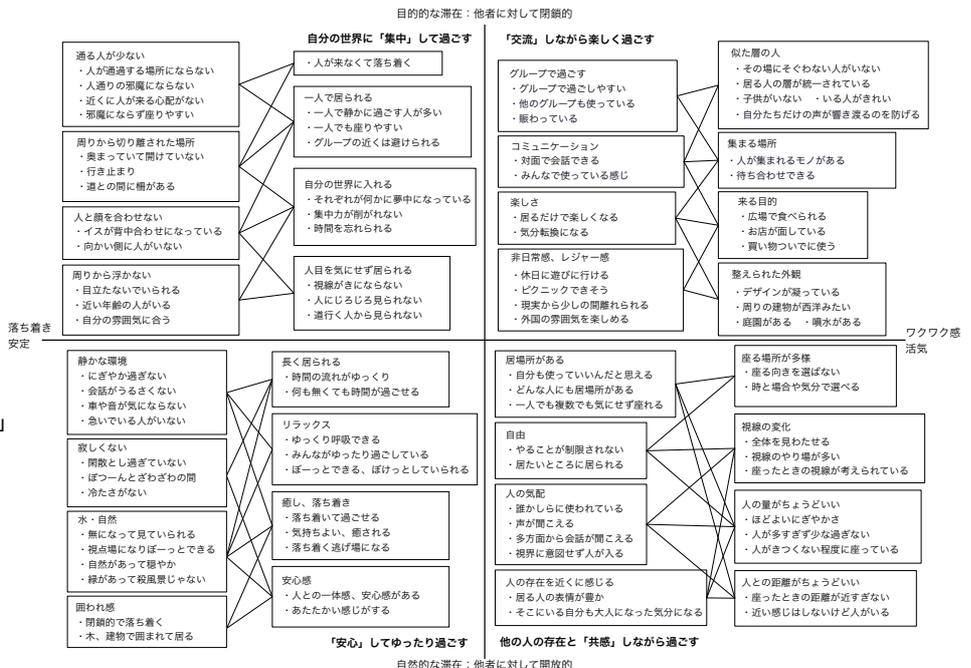
- ...目的の店
- ...ついでの店
- ...交流のある目的の店
- ...交流のあるついでの店
- × ...過去利用していた店



■人がつくり出す「広場の魅力」

都心の広場を対象として、立地や併設施設、デザイン等による魅力のみならず、そこにいる「人」によってつくられる魅力を見出そうとした。広場の写真を用いた評価実験を行い、広場における居心地の良さに関わるコメントを収集した。その時の居心地を、心的状態<落ち着き-活気>とく他者に対する開放性/閉鎖性>を軸として、「集中」「交流」「安心」「交流」の4パターンに分類した。

調査対象は、丸の内ブリックスクエア、汐留ゼロスタ広場、新宿55広場の3広場。平日休日1日ずつ観察調査を行い、人の振る舞いを記録した。比較的閑散としていた汐留は「集中」に、人で賑わう丸の内は「交流」に偏っており、一見対照的な2広場だが、他者に閉鎖的な点で共通している。新宿は「交流」「集中」「安心」「共感」の4種が混在し、他者に対して開かれた、多様な人を受け入れやすい広場であることが示唆された。



丸の内ブリックスクエア



汐留ゼロスタ広場



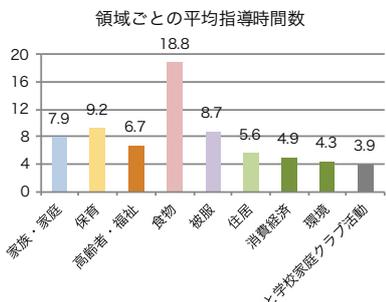
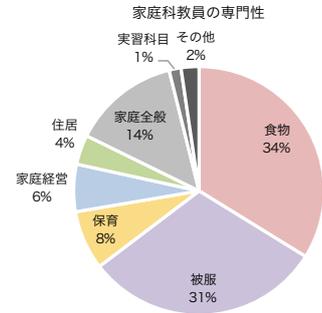
新宿55広場

■高等学校家庭科住居領域における学習・指導実態とカリキュラム構成

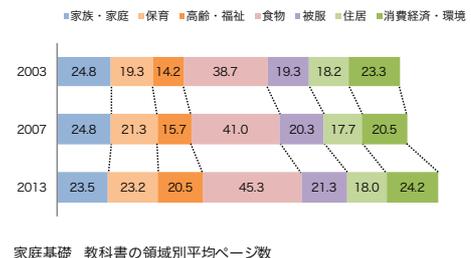
高校の家庭科の授業において住居領域は、家政学の一つの柱として本来その重要性は高いはずであるが、教育の現場では重視されていない現状がある。そのような住居領域の置かれた状況を把握し、要因を追求することを試みる。既往研究、学生に対するアンケート調査、6出版社3改訂分の教科書分析等より、住居領域の現状と歴史の変遷を辿りつつ、学習実態について把握した。

家庭科の学習時間は全体として減少しており、体験的な学習のための時間が十分とれない状況にある。担当教員の専門領域は食物系と被服系で全体の2/3を占め、住居系は4%と少なく、住居領域に関する授業・実習への苦手意識が少なからず見られる。とくに実習の時間は、食物と被服に多くが割かれる傾向がある。教科書のページ数は10年で1割程度増加しているが、住居のページ数のみ漸減している。

学生アンケートでは、高校試合に住居領域を学んだかどうか、記憶の曖昧な学生が多くを占めている状況である。家庭科自体は実際の生活に役立った科目として評価が高く、住居領域についてはデザインやインテリアを学びたいという声は少なくない。しかし、それに対応する教員の専門性も、そこに割くための指導時間も不足している現状がある。



困難・障害	割合
他領域に教えることが多すぎて扱う時間が足りない	18.0%
指導書や実践例が少ない	10.2%
生徒個々のプライバシーに踏み込むことが多く、取り扱いが難しい	13.0%
実習(建物・施設見学など)が時間的に行きにくい	19.5%
住居領域を独立させて展開することは難しい	4.0%
自分自身に専門的な知識・経験が足りない	14.4%
家庭・地域社会と連携を図ることが難しい	8.5%



■渋谷キャンパスにおける行動調査